

第2節 鐮川流域における敷石住居跡の様相

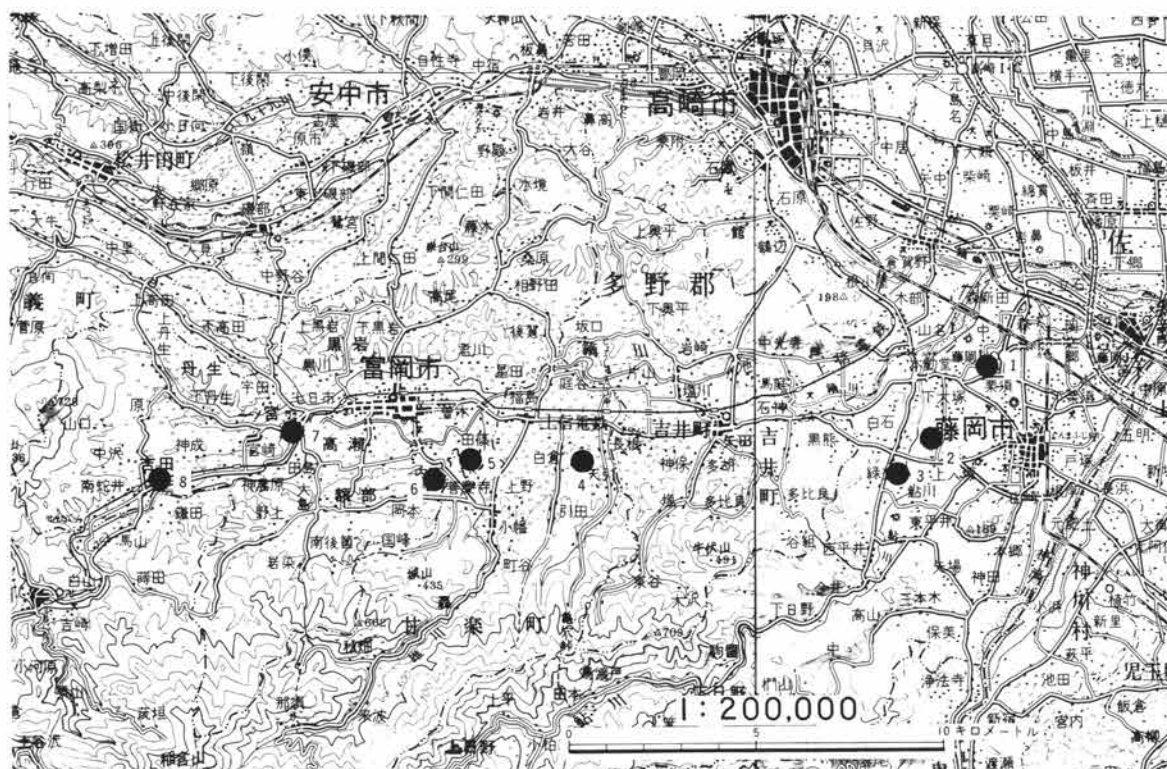
1 かぶらの谷の地形概観

群馬県の北西部に位置する荒船山頂に立つと、かぶらの谷が一望できる。荒船山(1,423m)とその裾野に連なる山々は、上信越国境の分水嶺になっている。この谷合いから湧き出る水は鐮川の源流となり、たくさんの支流を集めて、下仁田町、富岡市、甘楽町を東に流れて烏川に合流しているが、この流域を「かぶらの谷」と呼んでいる。下仁田町東方の鐮川流域は、川の流れも一転して緩やかになり、河岸段丘面が末広がりに平地をつくっている。富岡市を中心とした平坦地は、鐮川を境にして、南側には高瀬段丘面が広く発達している。一方北側には、妙義山麓丘陵、丹生丘陵、富岡丘陵など小高い丘が続いている。高田川(21,619m)、丹生川、そして鐮川(37.645m)の流水の働きによって河岸段丘(面)が発達し、一ノ宮・富岡市街地をつくっている。甘楽町一帯の地形は、下仁田町との境界に聳え立つ稲倉山(1,370m)に源を発して流れる雄川(15,394m)が、小幡丘陵の北側を流れて小幡扇状地を発達させて鐮川へ合流している。藤岡市周辺の地形は、関東構造線(下仁田―藤岡構造線)以南の山地(標高500～600m)と北側の丘陵(標高150～300m)及び、これを開析する鐮川、鮎川、神流川等に沿って発達する扇状地性の台地(標高80～150m)と低地(70～100m)に大きく区分される。

2 検出された敷石住居跡

かぶらの谷に関越道上越線建設に伴う調査が開始されたのは昭和61年からであり、これを契機として県内西毛地域での考古学的調査がさかんになった。調査では各時代の各種遺構が検出されたが、縄文時代の調査においては中期末から後期にかけての敷石住居跡の検出が相次いだ。藤岡市上栗須寺前遺跡(第332図―1)から後期の敷石住居跡2軒、同白石大御堂遺跡(第332図―3)から中期加曽利E4式期の敷石住居跡2軒、甘楽町白倉下原遺跡(第332図―4)から中期末～後期にかけて7軒、富岡市田篠中原遺跡(第332図―5)から中期加曽利E3式期7軒、E4式期4軒、同内匠上之宿遺跡(第332図―6)から後期1軒、同南蛇井増光寺遺跡(第332図―8)から中期末～後期6軒である。この他に昭和49年に調査された藤岡市中大塚遺跡(第332図―2)から加曽利E4式期1軒、昭和53～54年にかけて調査された富岡市本宿・郷土遺跡(第332図―7)から加曽利E4式期1軒が検出されており、合計8遺跡31軒の敷石住居跡の検出となる。これ以外にも下仁田町において敷石住居跡の調査例はあるが、詳細不明のために割愛した。31軒の敷石住居跡を時期別にみると、加曽利E3式期の敷石住居跡は1遺跡7軒、同E4式期6遺跡10軒、後期称名寺～堀之内式期4遺跡13軒となる。鐮川流域における敷石住居跡の出現は、中期加曽利E3式期に確実に求められる。この事実は、南関東・中部域においても敷石住居跡の出現としては一番早い時期に相当する。加曽利E4式期になると遺跡数も増加し、この傾向は後期へと続いていく。

加曽利E3式期の敷石住居跡出現前(円形竪穴住居跡に代表される)の集落は、鐮川の上位段丘面に立地している。代表的遺跡としては、吉井町長根安坪遺跡をあげることができる。未報告のために詳細は不明であるが、この遺跡からは加曽利E3式期の円形竪穴住居跡と小規模な環状列石、配石遺構が検出されている。ところが、加曽利E3式期のある段階(敷石住居跡出現前後)に集落立地が上位段丘面から下位に移行する急激な変化をみせる。田篠中原遺跡は中期加曽利E3式期のある段階までは居住不可能な湿地状態にあり、白石大



第332図 鍋川流域敷石住居検出遺跡分布図

御堂遺跡も同様な状態であった。このような場所に突如として集落が営まれた。こうした集落は加曽利E4式期まで継続されていくが、後期には再び上位段丘面（ローム台地上）に集落が営まれるようになる。鍋川流域では中期末の一時期に集落変遷史上に大きな画期を認めることができるが、これと軌を一にするように新たな住居形態である敷石住居の登場、大規模な配石遺構群の登場に特徴づけられるようになる。

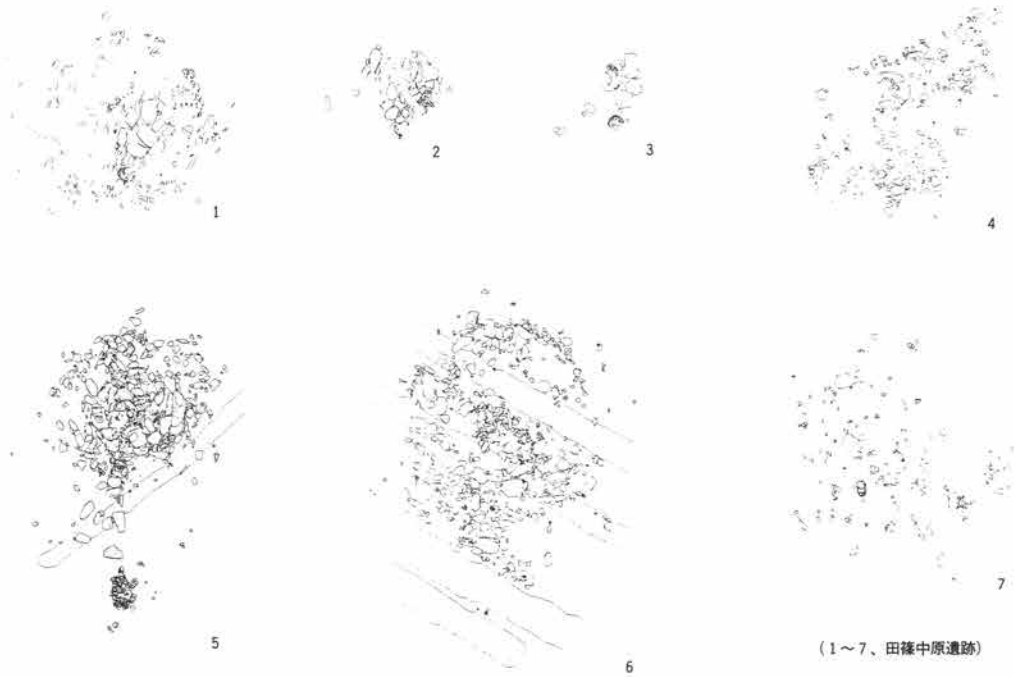
3 各時期における敷石住居跡の様相

加曽利E3式期の敷石住居跡は、現在のところ田篠中原遺跡検出の7軒のみである（第333図1～7）。E3式期の敷石住居跡を概観すると、円形を呈するもの（可能性も含む）4軒（第333図1～4）、柄鏡形を呈するもの（第333図5～7）3軒となり、加曽利E4式期と後期の敷石住居跡がすべて柄鏡形（第333図8～15）を呈するのとは対比的である。すでに田篠中原遺跡の報文中でも触れたが、加曽利E3式期は住居形態が円形竪穴住居跡から柄鏡形敷石住居跡へと変化する過渡的段階と把握することができるものであろう。

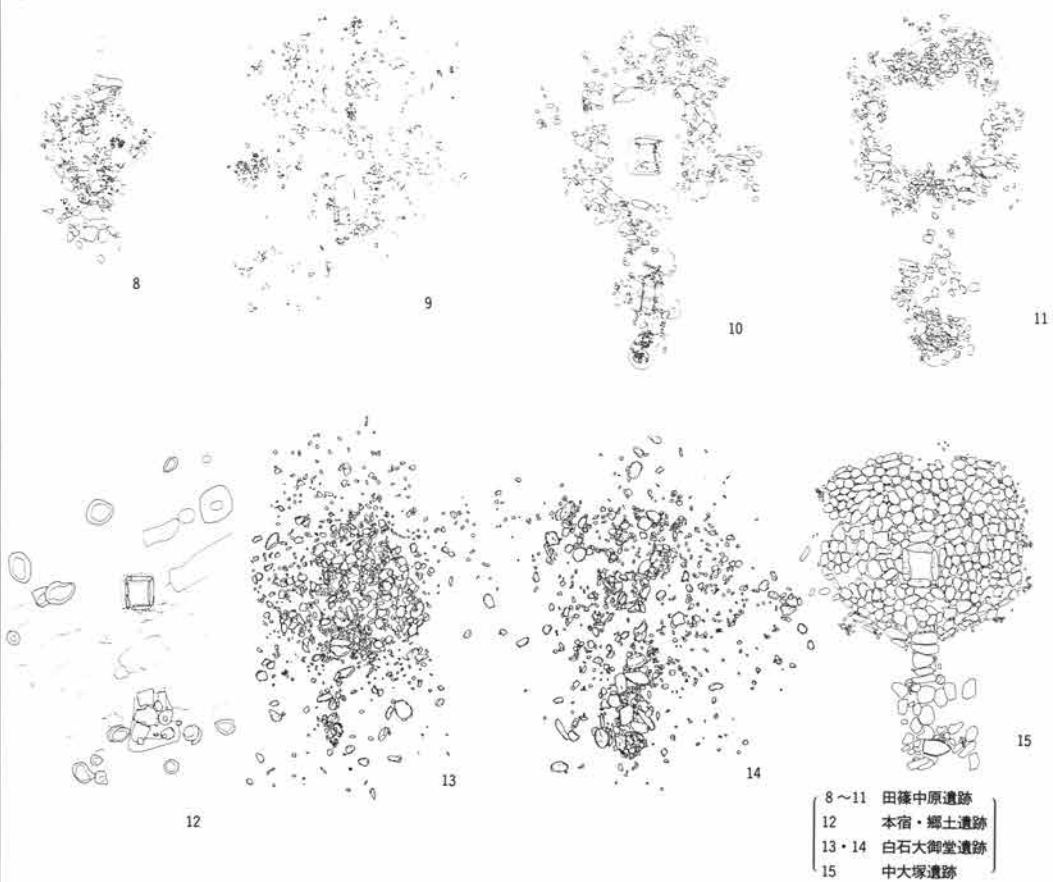
敷石住居跡の敷石状態をみると、加曽利E3式期では主体部に全面敷石を施すことはなく、あっても部分敷石（炉辺部）であり、また周縁に小礫（縁石）を配することである。この傾向は加曽利E4式期にもうけつがれ、白石大御堂遺跡の2軒にも認められた。主体部に全面敷石を施している例は、藤岡市中大塚遺跡例（第333図一15）、甘楽町白倉下原遺跡例、富岡市南蛇井増光寺遺跡例があり、加曽利E4式期でも後出的なものとなろう。後期の敷石状態は、富岡市内匠上之宿遺跡、甘楽町白倉下原遺跡B・C区検出住居跡のように主体部は無敷石となり、張り出し部のみ敷石を施している。以上のことから敷石の変遷は、加曽利E3式期に始まった部分敷石（炉辺部）・縁石が加曽利E4式期になって全面敷石へと展開したものであろう。しかし加曽利E4式期においても、主体部は縁石のみの敷石住居跡が多いことから、全面敷石との相違を時間差としてとらえることができる。後期には集落立地が上位段丘面へと前時代の集落立地に回帰するように、敷石も縮少傾向に

鎭川流域検出の敷石住居跡

加曾利E3式期



加曾利E4式期



第333図 鎭川流域検出の敷石住居跡変遷図

なり、わずかに張り出し部のみにその名残りととどめることになる。また屋内施設である住居内埋甕については、加曾利E3式期は基本的に1個体である。しかし田篠中原遺跡の36号配石遺構(柄鏡形敷石住居跡第333図-5)では主体部と張り出し部の接続部から1個体と張り出し部の先端部から1個体の計2個体が出土しているように、複数個体をもつのはまれではあるが存在している。加曾利E4式期では1個体出土している住居跡5軒、2個体以上出土している住居跡は6軒となった。その埋設場所は、接続部1個体2軒、接続部2個体1軒、張り出し部先端部1個体3軒、張り出し部先端部複数個体2軒、接続部と張り出し部先端部にもつもの3軒と、統一性はない。しかしいずれも住居の出入口部に該当する場所である。埋設位置に統一性はないが、遺跡間で比較してみた場合にはある共通性が認められる。たとえば、田篠中原遺跡での加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡である24号配石遺構には、接続部1個体、先端部に1個体の埋甕、23号配石遺構には先端部に2個体の埋甕が埋設されていた。同様な傾向は白石大御堂遺跡の2軒の敷石住居跡にも認められた。1号敷石住居跡には張り出し部先端部に3個体の埋甕、2号敷石住居跡には接続部と張り出し部先端部に埋甕が検出された。同一集落内における埋甕受容の違い、また他遺跡間における埋甕受容の共通性など、埋甕が胎盤を収納した容器と結論づけたとしても、さらにそこに秘められた奥深い意図を感じざるを得ない。ところが、後期になると埋甕の設置はほとんどみられなくなる。他の遺跡では箱状石囲い施設や出入口部土壇へと変遷してゆく傾向が確認されており、敷石の無敷石化と同様に、後期になると何らかの祭祀の様相が薄らいでいくことが判断されることはたしかである。

今回とりあつかった鎭川流域は日本でも有数の石材の豊富な地域である。南関東・中部域にさきがけて敷石住居跡の登場も十分に納得できる背景はあるが、中期加曾利E3式期から後期堀之内式期にかけての期間だけでさえ、部分敷石→全面敷石→無敷石へと敷石住居跡の形態がめまぐるしく変化をしているように、単純に石材が豊富な地域だからと結論づけることはできない。敷石住居跡の登場する中期末に集落立地が急激に変化する大きな画期を認めることができたが、こうした社会的要因も深く考えていかなければならないであろう。それにしても鎭川流域は、他地域にさきがけて敷石住居跡が出現したことは間違いのない事実である。

(菊池 実)

第40表 縄文時代敷石住居跡一覧表

No	遺 跡 名	所 在 地	遺構 No	構築 状態	形状	敷石状態 主体部 張り出し部	屋 内 施 設					出 土 遺 物	時 期		
							炉		埋 壺		立石				
							石囲	埋 壺 地床	接続部	先端部					
1	上栗須寺前	藤岡市上栗須寺寺前	3	竪穴	柄鏡	縁石 ○(?) 部分	○	—	—	—	—	—	後期		
			6	平地	?	縁石 ?	○	—	—	—	—	—	後期		
2	中 大 塚	藤岡市中大塚字鎌倉		平地	柄鏡	全面 ○	○	○	—	○ ₁	○ ₁₊₁	○	石棒・多孔石等	E4	
3	白石大御堂	藤岡市白石字大御堂	1	平地	柄鏡	縁石 ○	○	—	—	—	○ ₃	—	多孔石・凹石等	E4	
			2	平地	柄鏡	縁石 ○	○	—	—	○ ₁	○ ₁₊₁	—	石皿・凹石等	E4	
4	白 倉 下 原	甘楽郡甘楽町大字白倉	A区97	竪穴	柄鏡 (?)	部分 不明	—	○	—	—	—	—	多孔石	後期 称名寺	
			A区37	竪穴	柄鏡	縁石 ○	—	○	—	—	—	—	—	後期 堀之内	
			A区96	竪穴	柄鏡 (?)	部分 —	○	○	—	—	—	—	注口土器	後期 堀之内	
			B区26	竪穴	柄鏡	全面 ○	○	—	—	石組み	○	—	多孔石	E4	
			B区89	竪穴	柄鏡	—	○	—	—	○	○ ₁	○ ₂	—	多孔石	
			C区76	竪穴	柄鏡	—	○	—	○	—	—	—	—	石 皿 多孔石	後期 堀之内
			C区77	竪穴	柄鏡	—	—	○	○	—	—	—	—	後期 堀之内	
5	田 篠 中 原	富岡市田篠字中原	1	平地	円形	炉辺 —	○	—	—	○ ₁	—	—	多孔石・凹石	E3	
			2	平地	(円形)	炉辺 —	—	—	○	○ ₁	—	—	—	E3	
			5	平地	円形	炉辺 —	○	—	—	○ ₁	—	—	—	多孔石・凹石等	E3
						縁石									
			8	平地	柄鏡	縁石 ○	○	○	—	○ ₁	—	—	凹 石 等	E4	
			17	平地	—	縁石 —	○	—	—	—	—	—	石皿・多孔石等	E3	
			23	竪穴	柄鏡	縁石 ○	○	—	—	—	○ ₂	○	石皿・多孔石等	E4	
			24	竪穴	柄鏡	縁石 ○	—	—	—	○ ₁	○ ₁	—	石皿・多孔石等	E4	
			26	平地	柄鏡	縁石 ○	—	○	—	—	○ ₁	—	石棒(?)・凹石等	E4	
			36	平地	柄鏡	炉辺 ○	○	—	—	○ ₁	○ ₁	—	石皿・多孔石等	E3	
			縁石												
												</			

※未発表の資料については、調査担当者である石塚久則氏、木村 収氏、新井 仁氏、伊藤 肇氏、小野和之氏、亀山幸弘氏から御教示いただきました。記して感謝いたします。